

美術の窓(153)

古賀太『美術館の不都合な真実』の読書感想文

大和文華館館長 浅野秀剛

新型コロナウイルス禍で、家にいることが多くなった5月下旬、新刊の新聞広告に目を留め、すぐに買い求めて一気に読了したのが、古賀太『美術館の不都合な真実』（新潮新書、2020年5月20日発行）である。著者は、国際交流基金で5年余勤務した後、朝日新聞社で15年ほど主に展覧会企画に携わり、現在は日本大学で映画史を教えているという。私は著者を存じ上げないが、書いていることはほとんど事実である。美術展業に身を置いている者にとっては特に目新しいことが記されているわけではないが、一般にはほとんど知られていないことを分かり易く解き明かし、問題点を概ね的確に指摘している好著と思う。以下はその感想と私見である。

著者が「不都合な真実」といっているのは、日本の美術館における大型企画展の収支を含めた構造である。

日本の美術館・博物館の入場者数が企画展に頼っている＝常設展の入館者が非常に少ない、のは一般にも知られている。近年はインバウンドの増加もあって常設展の入館者が爆発的に増えている館もあるが、まだそれは一部であるように思われる。日本では企画展の多くに新聞社やテレビ局などのマスコミ（マスメディア）が関与する。大型企画展ではほとんどがマスコミの主催であり、大宣伝を、大量動員することによって利益を得る。換言すれば、利益をあげたいから新聞社とテレビ局はタッグを組み大動員を図る。それが著者がいう「不都合な真実」の一つであるが、それは観客の多くが多かれ少なかれ感じていることであろう。

国公立、私立を問わず、年館入館者数が少ないと、美術館は

設置者（行政や親会社）から非難を受ける。だから企画展をやらざるを得ない。これも「不都合な真実」といえなくもないが、そうだろうなあと多くの人が頷くかもしれない。

日本に貸せば高額な貸出料を得ることができるので、海外の美術館は丸儲けする。海外の美術館人は日本を「金づる」「展示会場」としか見てないという。私はそこまで軽蔑されているとは思われないが、作品を日本に貸せばお金が取れる、という状況を作ったのは日本の関係者だというのは事実である。それも「不都合な真実」といえるかもしれない。

著者が最初に勤務した国際交流基金は、日本のイメージを高める役割が期待されている。その一環として、海外における日本関係の展示に関してお金を出し、時に人も出す。日本文化がメジャーになってきた今でもそれを続けているのは、まるで土下座外交と著者はいう。それも「不都合な真実」ということになるだろう。さすがに私は、土下座外交というのはいい過ぎと思うが、フランスで開催された「ジャポニスム2018」に日本側が40億円使ったことを知ると、そこまで金を出す必要があったのか、来年日本で開催する計画の「日本におけるフランスの季節2021」に、フランス側はそれに匹敵するお金を出すのかということを考えると、少し情けない気分にはなる。

本書の中心は第3章で、その一節に「国立館の「不都合な真実」」がある。そこなかで、国立館でマスコミ主催の展覧会を開催する場合、その費用はすべてマスコミが負担し、国立館は一切負担しないばかりか、入場客一人につき常設展相当の金額を受け取る、という事実を記す。

国立館はそれをマスコミに押し付けているわけではなく、マスコミも了解して（納得しているかは別だが）実施している。そのことを関係者は皆知っているのに、隠す必要はないのであるが、広く周知されてはいない。美術展にマスコミが関与する場合、国立館は別として、実行委員会方式、分担金方式、貸館方式、名義主催などがある。著者はそれらを朝日新聞社に入って教えてもらい、「国際交流基金において海外で開催する日本美術展の仕事をしていたので、展覧会の仕組みは知っていたつもりだったが、この日本独自の美術館・博物館の予算方式は実は全く知らず、目からウロコだった。特に国立館が一切費用を負担しない仕組みには心底びっくりした。」と記している。

それでは、何が「不都合」なのか。「美術批評を載せている新聞社が展覧会を資金的にも内容的にも運営している状況はやはりおかしいのではないかと著者はいう。私を含めて美術館関係者は、昔も今も、展覧会の広報ではマスコミに助けられている。主催でない場合でも、時折来訪して取材して下さり、紙面やテレビで紹介していただいている。取材下さるということは報道していただけるということであり、それはすなわち、いい展覧会だといっただけなのと同じなのである。取材したのに採り上げない、取材したが難点を指摘されたということは記憶にない。もっといえば、悪い点を指摘されるということがないという点で、日本では、美術批評は美術賞賛とイコールになっているのは確かである（美術批評だけではないが）。批評に値しないと思われるものはそもそも採り上げないので、批評の対象に

するということは、どうしてもいい点を書くということになりがちであるが、悪い点を全く書かないというのは日本の批評の特徴といってよいであろう。何事にも距離を置いて見る癖のある私には、いい点しか書かない美術批評しか載せないマスコミが、展覧会を運営することが不適切だとは思わない。

国立館は、全額お金を出さないうで大型企画展を開催でき、しかも、かなりのお金が入る。マスコミも「ほかでやるよりも最終的には収益があがる」から国立館で開催しているわけであり、ビジネスと捉えれば全く問題はない。著者は「国立であれ公立であれ私立であれ、展覧会の開催をマスコミの資金や宣伝力が支えているのはどう考えてもゆがんだ構造であり、どちらにとってもよくない。そしてそれは世界の美術界のスタンダードからは大きく外れている。」という。著者の考えに一般の観客、すなわち国民がどの程度賛同するかは分からないが、そういう問題提起をしたという意義は大きい。最後のツケを払わされるのは超満員状態で作品を見なければならぬ観客であるが、それだって、混んでいるのを承知で来ている、という考え方もある。ただ、私も、まともに作品を見られない状態まで人を入れるのは望まないし、混みすぎている展覧会には原則として行かないようにしている。

ともあれ、本書は、他にも現在の日本の美術展をとりまく諸々の状況を簡潔に記しているのので、一読をお勧めしたい。そして、新型コロナウイルス禍後の美術展がどうなるのかに注目していただきたい。

季刊 美のたより No.211

令和2年7月4日

発行 大和文華館